村井長庵利生の仇討
雪夜の濃紅
下之巻
津田秀琳編輯
紅太堂寿梓
櫻齋房種画
上

A651
2上

村井長菴
札迺辻雨夜孔

津岡
彩琳
編輯

濃紅

木京板
岡林

48-8617

札迺辻雨夜の紅二編序

良藥口に苦しとは辻仙よい人意ってなるほど人
秀雄大人が紅本堂の雪ふる夜と名づけ彼の長
庵の顔未だ紙の野辺ふる夜でもたちぶり意気方
の四口みを入様苦き年氏去嬉く花甘き甘ざる
乃七が減貫詞合の机に筆ト先づ花め
大岡角野第一稿の釋きに聰ふし。
氣善惡あどけ頗る効強多しとい。

明治十七甲申歳日

課田園古雅誌

寛政印本
閻雲愚抄
小手塚二次
道十郎女房於光

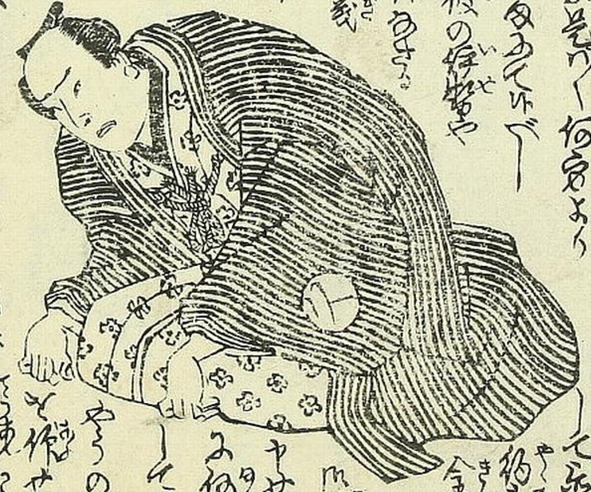
伊勢屋千太郎
咽人詠
於富屋小夜衣

惡人盛
時天勝
天定
人
勝
村井長庵
伊勢屋貞吉八

初ショリ
去る程みい勝や甚三郎の
養子千太郎小夜衣より送り
村井長庵

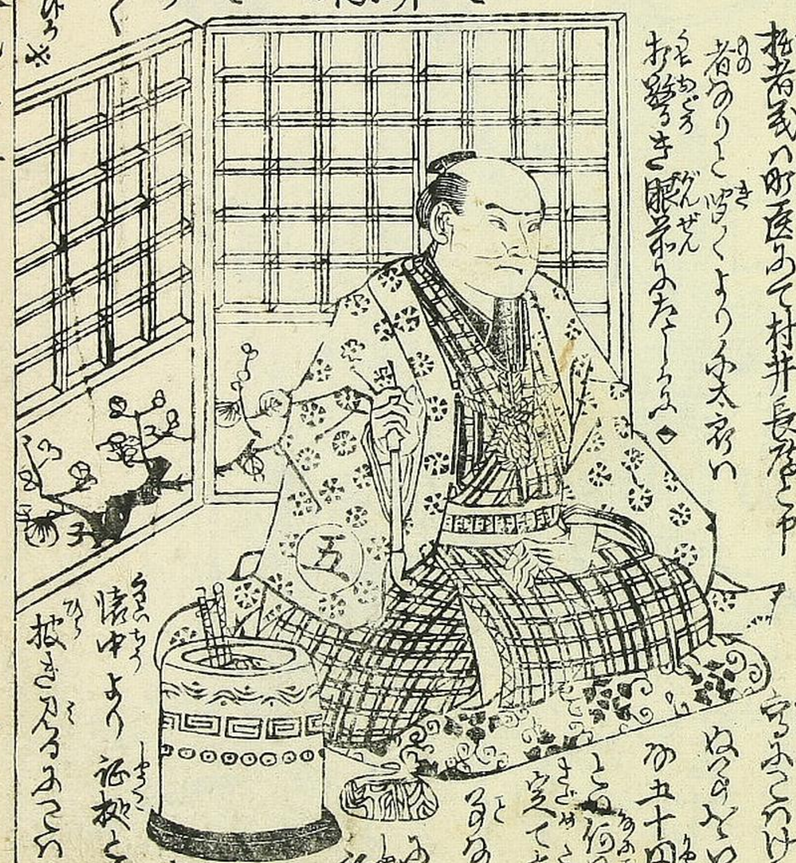
つぎて

とゞめて長竜い※先日は又は源ゆみこまく〜ぶ平ごされ
ゐます　都よりて　萬て四絹屋の通り宅上いてたりこと
ゐたらば四かりの　み長竜いと不思議みを見かく　何方より
紙屋宗上人と　ひこ〜みや何和の何さまみてひで
一通認め金よ　うと空てうそ咲てヤける彼の仔蜜や
とこ〜ゐる渡し豆　ちく日忘れいなさ。
四五日内みい糸　子太方くよりやひたれいなさ。
戻して我家へ　まで四五の中より小袖衣の義
送れて第れば　みれいろ〜と四肯おト
四出あれと堅　されれ有ぐ〜よりて四絹
く日を待て　糸の通り今日第しと
て特前い五ひ　いければ長竜いよ〜
み我家へ帰り　ふ〜んの件みてそれい
金く人遣ひみてもあるべー　るやと云へば長竜郎

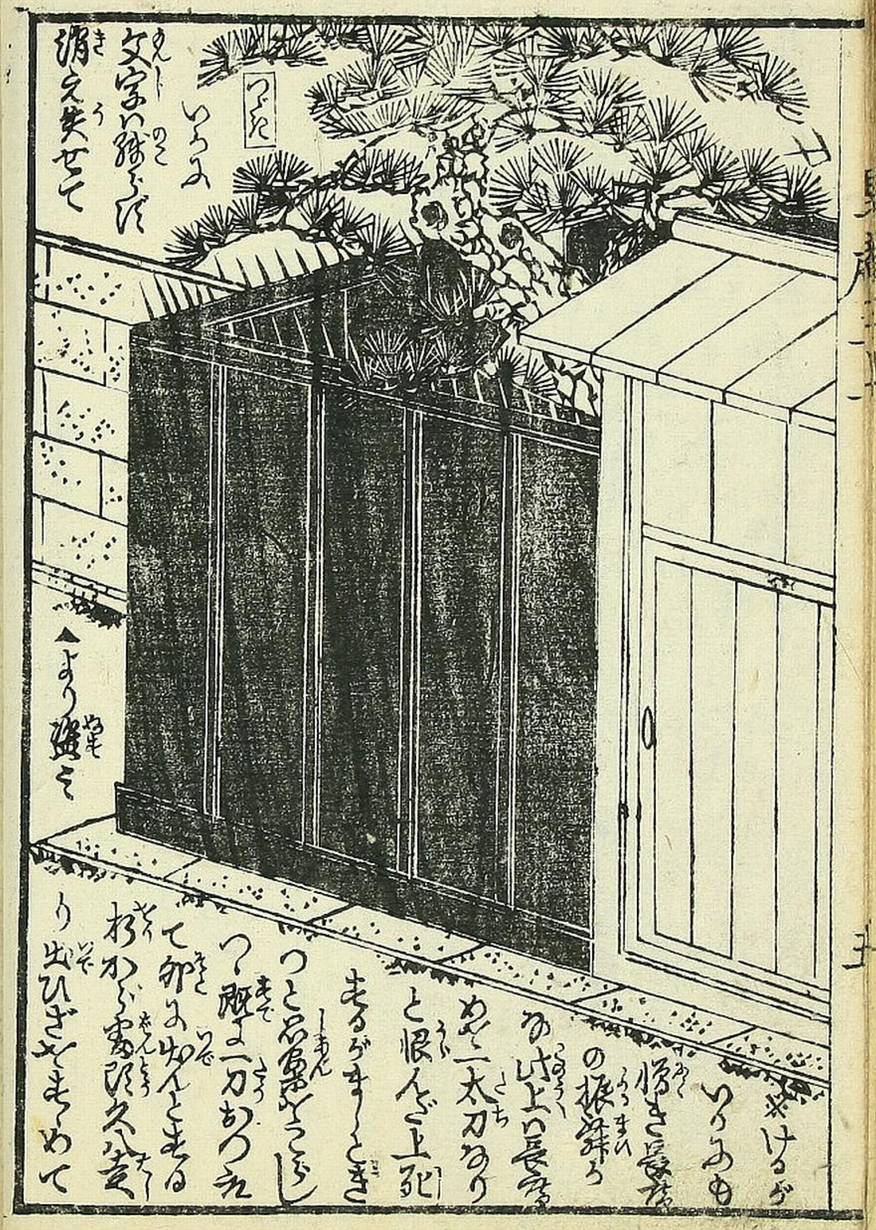


◇渡せ〜五十円　小袖衣を永文
仮来れ　金子を　て左
みれと　やうの義
そ作せ

けるを祝み　拵者義い所医りて村井長竜と申
子太方い祝る　者のりと申くより子太方い
計策とい家　お願ゐき眼前ゐたーゐふ◇
右ふ〜四五日
経て仏もいて
く〜支度して
粧て三ヶ月村井
方へ参りて紫内
さて子の長竜
つまより立出て
夫と見るより
子太方い是へ〜
伯父さんみそ※



ゐるみこのけーゐふ
ねつのそいみ入う
子五十円の金
とこ何つのなや
さざゃこるきん
完て大宣の
るなれば文
子の何ぞ
伝拠有
やとの
時みま
太方い
情ゆより伝拠とり出し
拵さ入るみこい



つゞき

いろゝの文字は殘らず消え失せて

▲より強さ

※けるが

いろゝの

怪さ長たの

の振舞ら

し上い長寸

めて一大力あり

と恨人ぞ上死

まるがまゝ

つと高高とこし

つ殿上一力あり

て邪ゆ出人とまる

わかゝ家ぞ久人黄

り出ひざをまゝめて

いと恐ろしき

強面なれどコレいと年りの響ろ

きけり扨いろの字をあて恩めし物

なれば二四日も強れば中文字

字ゝ消失る者く

長居ろして

やうたりと

思ひまゝぞ

いよ〳〵怒りて狂

上さんゝみおちく

されし多太郎も

無念と思へども

右の金子も書文▲

出せし金なれば

若しも裏文へ

ゆえなが文りも

との田

りく若旦那驚く

お話下るべし今藤

あて家いれいつゝも

四家念いるるなれ

ど見

とも

出

のあ

まり

やらぬまやまり陰なるる

そうとけて陰〳〵と係わける

ぞ今のゝ太郎もいよ〳〵面目な

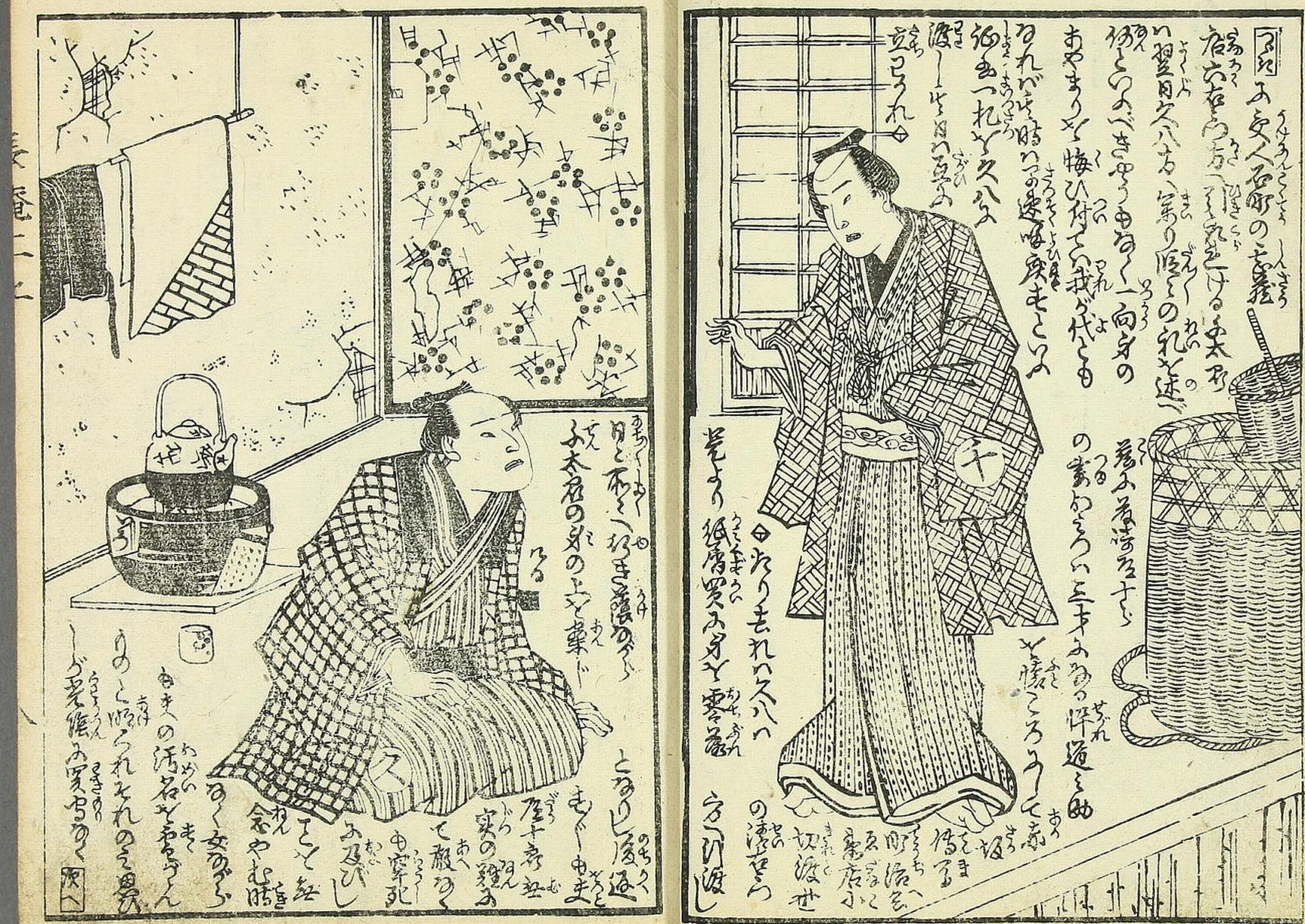
く改めれ伏〳〵歎ずり

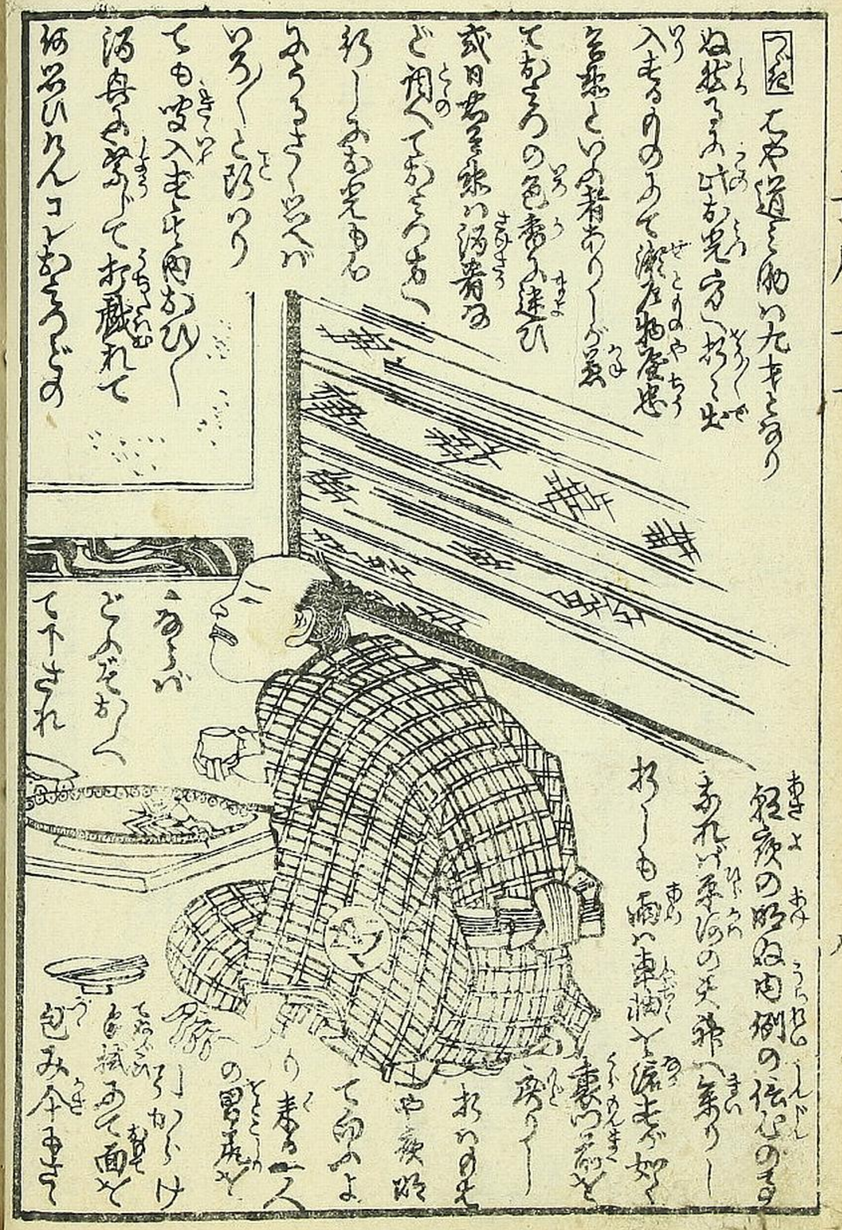
次へ

つゞき　きゝる積りの太郎ぶ持出せ
金五十円ばかりの書文五十本の耳み
入しうがの逢ふべく
まで右の始末と
聞き出ければ
久八はえよう
笑みの知らざれども
富子千太郎が盗也
長者のうらうらと
わーすーみーの
る有是を明白み

くゆさび若旦那の身の上は定い勘年も
有まゝと思ひ我が身の文や交さみさん
と言わ　と迫こと出是迄養生ろう
出家と蒙し此久
八和と出龍の仕業うも
是なく実い是まで
たび捨びてー金ー私の要ひ迄ーとなり
と云立るふぞとて客より音曲の五
云来るれば和の云者もなく有合
梅吉さんーふお柳ーー
上ふ竟ふ恢然や久八は此家の内
を脱ーしなりぬ千太郎は此
さあと見て狗き我みせ　要

とあの久八ふ知み彼り我を救ひ
心底い実ふ有ぐまに恐い忘れいと
さねとさい出さねとむの内みて
あゝ久八の跡見
あくり
乾のぐ
ら伏相
みつ
外の浜ちを後悔
しとで居こり
る去れば
久八が
の五

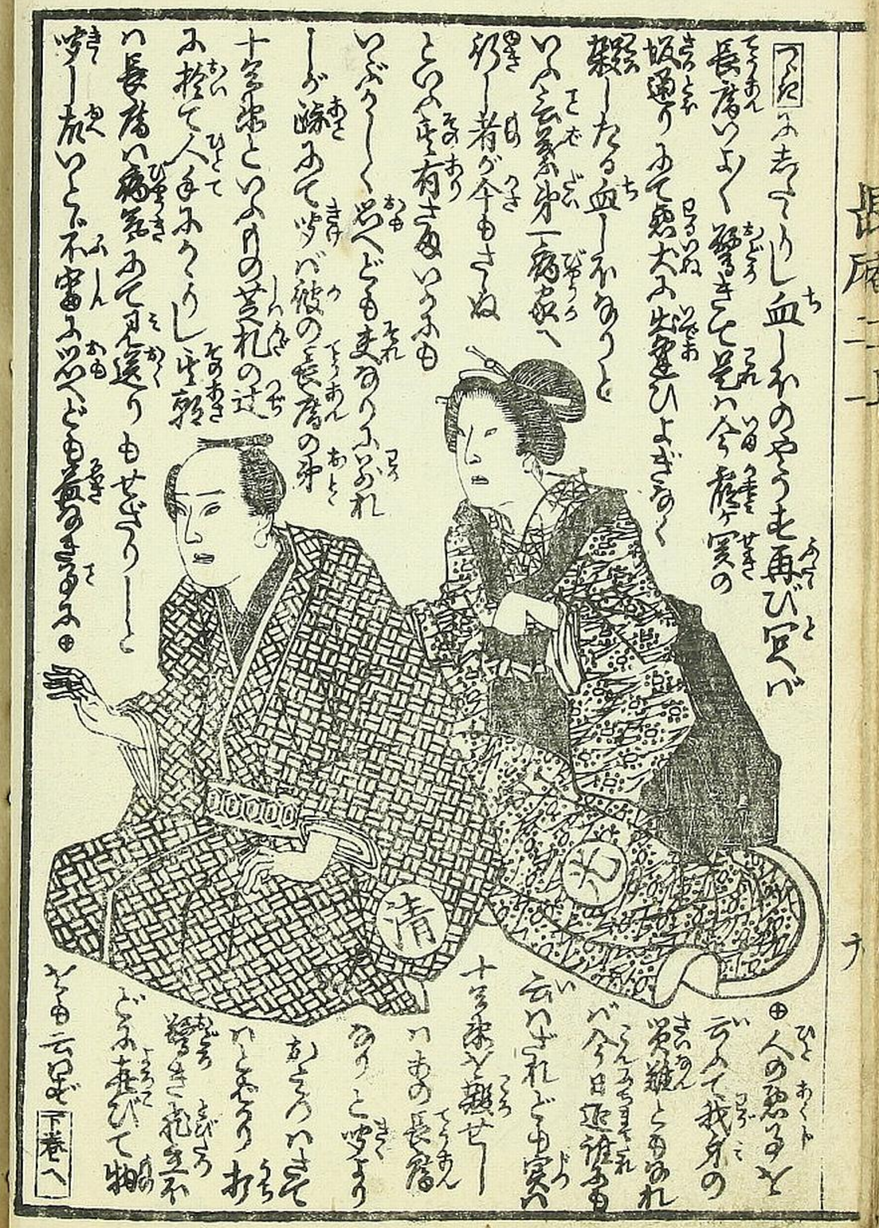




[illegible]

[illegible]

[illegible]



[下巻ヘ]

[上巻ヲ]

つ立上り　長助方へいそぐ忠三郎の姿せーるども外をさーてそ出ける

際ゑ祭り忠三郎いたく苦悩と行屋さ

つゞき べみて落籍 ▲年月過中山侯若ちぎり閑べみて新妻海たるるを又て新妻

つゝたるるを再び たつるやうなる ぜんぜんたるを拙れば新妻と成ると

中立み及ぶ時いそぐ いみ時ぐらぎざる義なり ちゝ

此義許破るの段なれど 性成悪人もあれば

ちゝ性成悪人もあれば 通り閑べて

いやうふも紙子弱さん とまれば

とまれば日い互ひ家へ帰り ちゝ

翌日家主長助いろ 家主長助

と連て彼の忠兵衛へ 忠兵衛

来て初時むころごのく 家主

参和は吹しなされ 光

上わくは迷惑なる 光

淫婦人は立合 ▲とまり

けるなり ※更

やされとのつぴき ※姑ぐるこういなる

ゆくね新妻ふ忠兵衛 中上げられたるく

もは姑み結んで帰方 いるやうなる義体材らるこも

ゆく形式しければ 顔の色若中さぶ姑辛は元閑べ

是より長助いろ の後新妻なると

当と親わ中立 中上るあより大

中村の此家の大屋 屋公の旅宿の流き

新妻ちよの此白粉へ 此一らん有て※

姑ひ立けるみ赤る新妻の

の此元閑とのりたゞめて

長助法左ゑ門の三人を

此屋へ大屋どの作せられ

けるいろ新妻ろ此旅宿の者い先▲

中立ふ旅宿

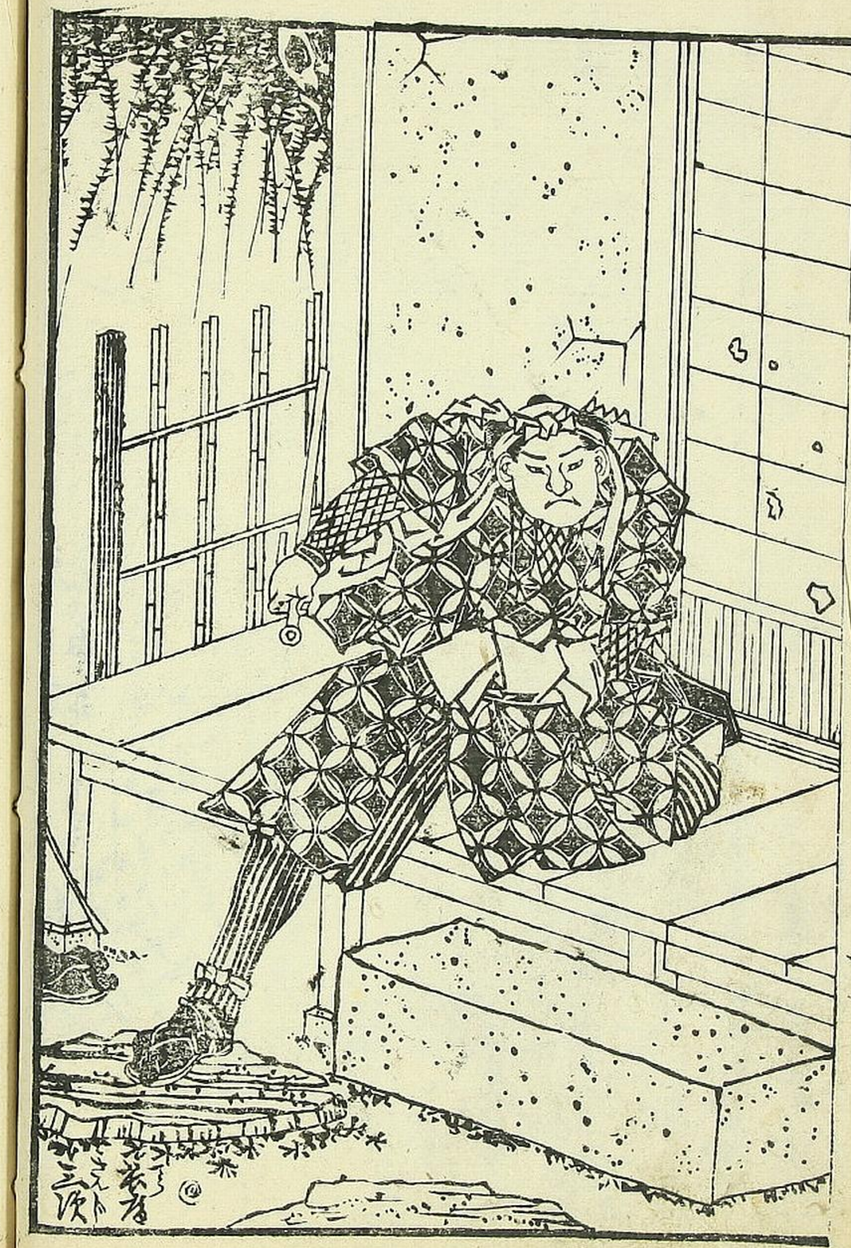
の義体材

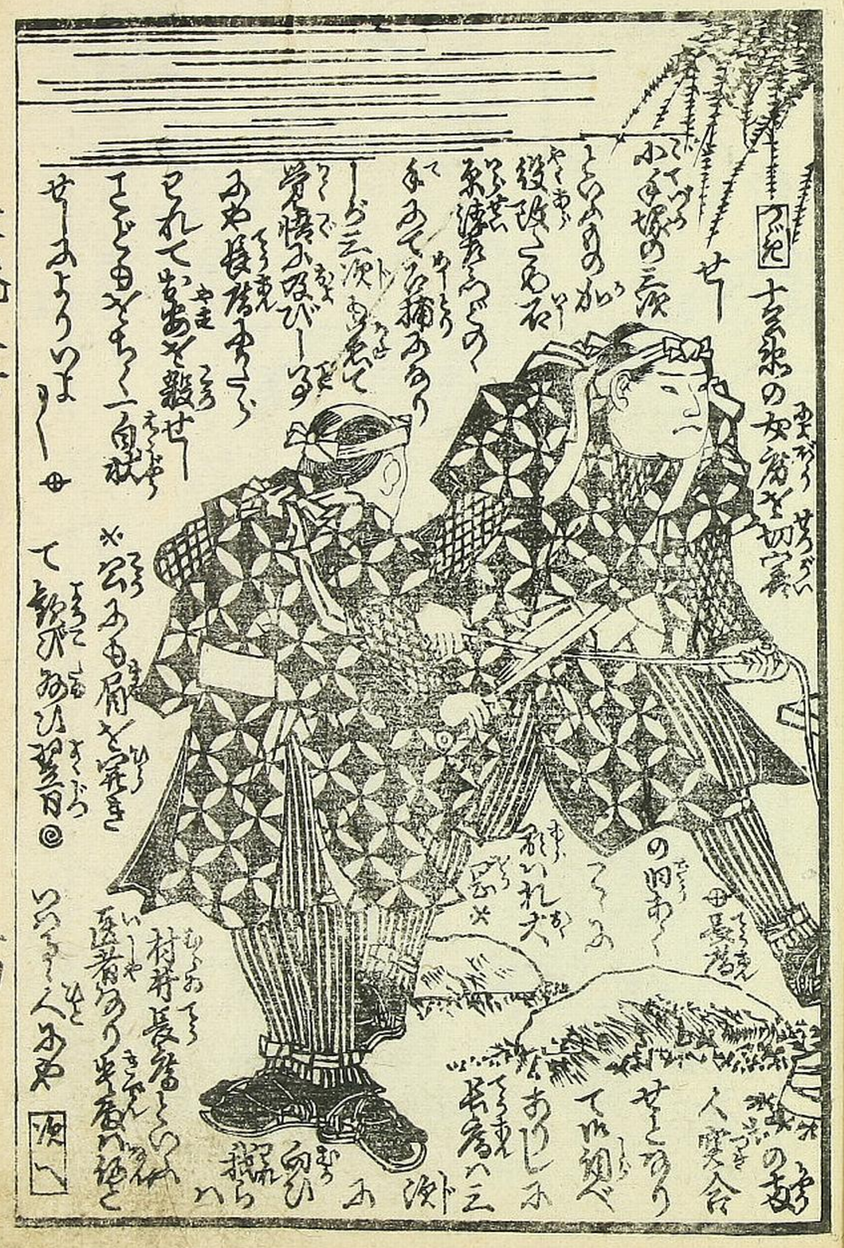
られ

方猟町ふ

長屋

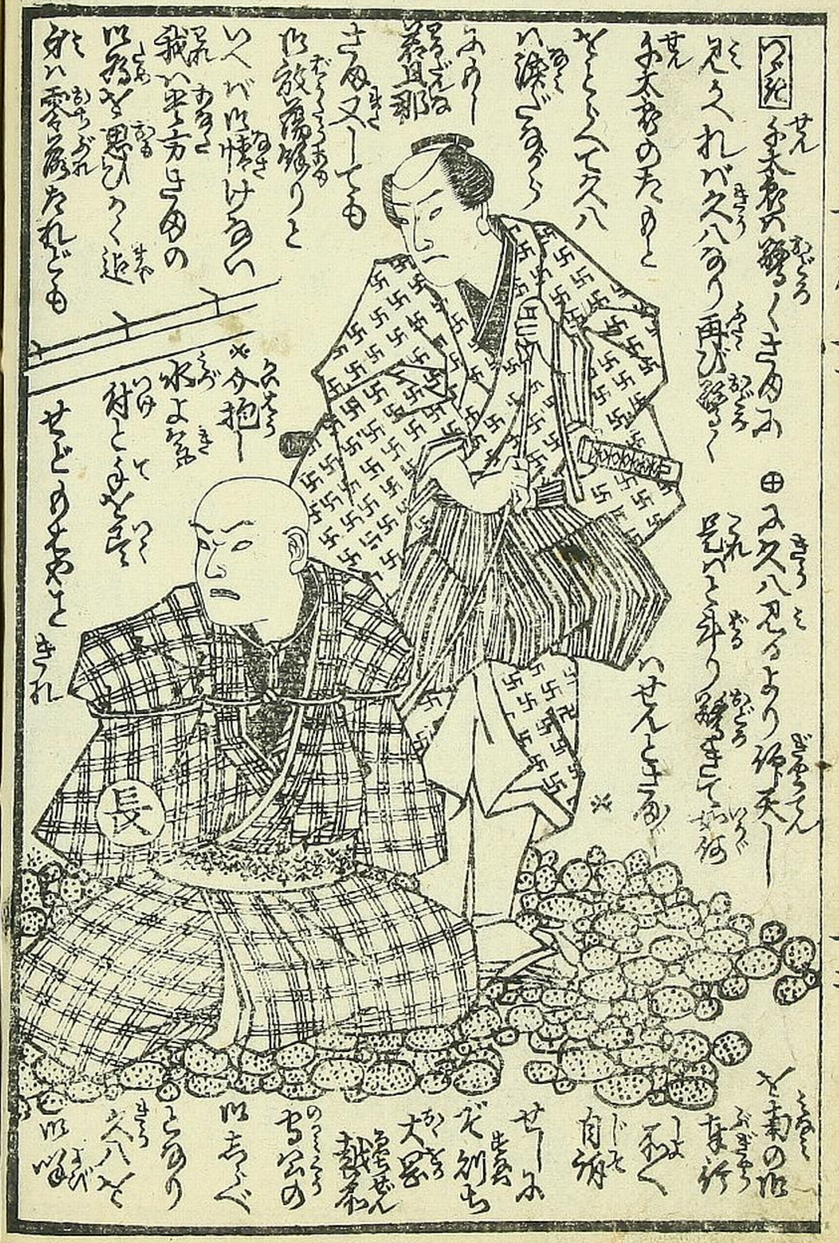
つぶ記
見文表ゝゝ
穀蔵米出来やう
よりの
これなんとヤ
長崎へ捕縛
放大器どのみも
大器公の面
怪き奴と云
ちゝ
ちゝ
ちゝ





つゞき

お太郎は驚くまいぞ　⊕みくハ見るより御夫ー
えゝそれでくハるり再び驚く　見べと手の縁きて
お太郎のたゝりと　いせんとき
そゝくてくハ
い深ぐるくる
みゝりー
義貞那
さゝ又ーても
仇敵張りと
いべは情けない
我い出方さ
仇を思ひ
外ハ雪



あーも恨さと
ド出せん
大ゝるみーて下さる
新家がう
けて今
も
の人もあれば
宅へ来
宅へ
拵行と
みや久ハの
こうしものなるう
お太郎ハウント云
てきたなれー

つゞき　東南有屋の釜へ
りしゝ　大呂どのゝ
再び久八が南ひ
奉細の男情とや
迹べよと再三のと
繁み久八も今ハ
徒なくよりて是
近ゐ太郎の欲
奉より自分の

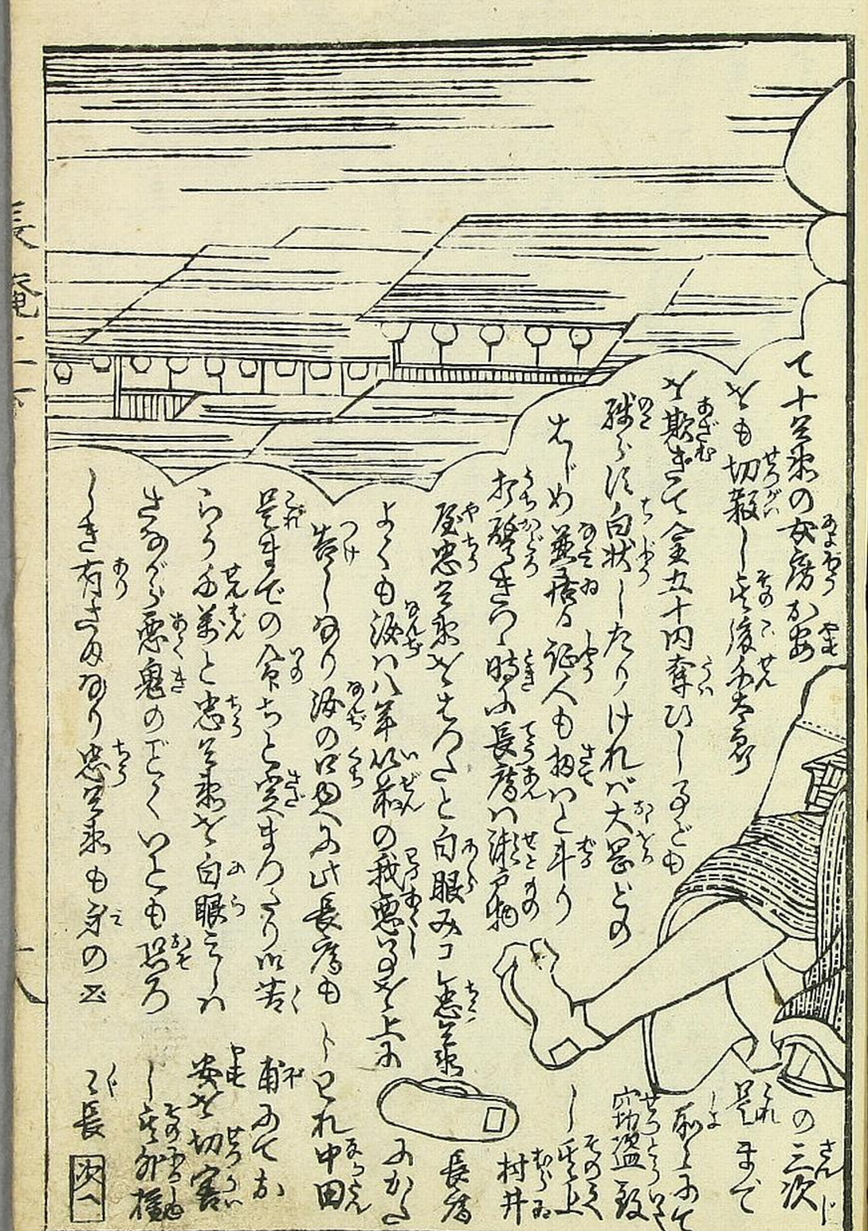
よりて是より下谷度の地
丁山小家長のあんなも
ぱやぱやーと分り又係
めさぐ行長庵がか
ぱぱぱーみのり
大呂どのゝ長
庵が向ひいろ
が長庵是
近さ
の接宿が白状
せすれども
べよりやたなぬこハやされまーいろが
くこやされる時長庵へ

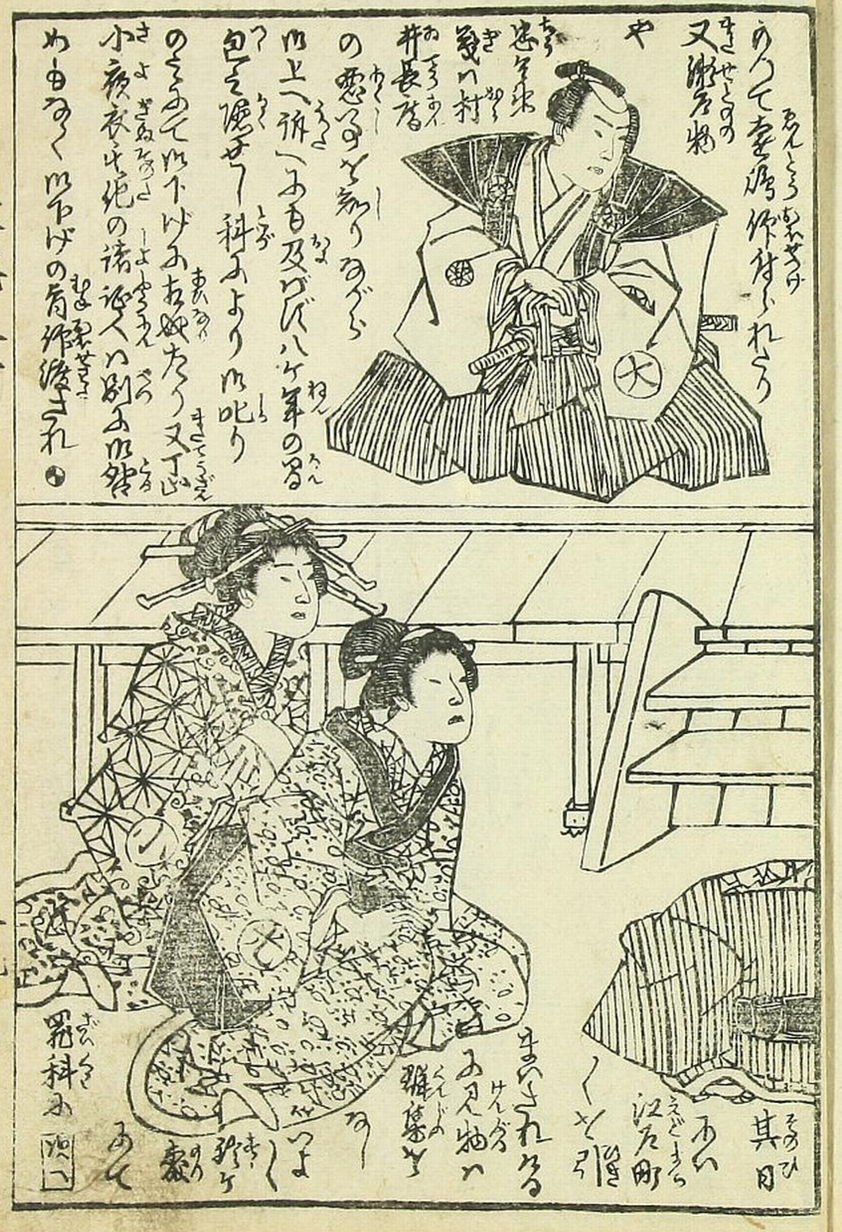
飛とのりしるより
長庵が欺むられて
五十内の
金子を
奉ひろ
れーより手ゝ府
のふ女持ちをいろ
んと浪ま
つて殺
せるて
どもと奉ーく
中上る程が大呂どのゝ
れつよく長庵恩る奉れの時より

れ伏ーいろ
あろと元四
流石の
長庵も
岩ゝとその通れ
けん
大呂
どのゝ
向ひ
今日
変

白状せすと

下
下




のうて妻屋作すれとう
又濡名物
や
悪せ
義い村
井長屋
の悪ゆを家りゆくら
四上へ行へみも及びび八ケ年の罪
白ケ徳せー科みより四叱り
のくるみて四下げみ右ゆたくう又下
小夜衣七絞の法論人い別みの四答
わゆるく四下げの月作濡され
其日
江戸町
罷科み
あい
ゆ
くよ
ゆ
ゆ
ゆ

010190515988

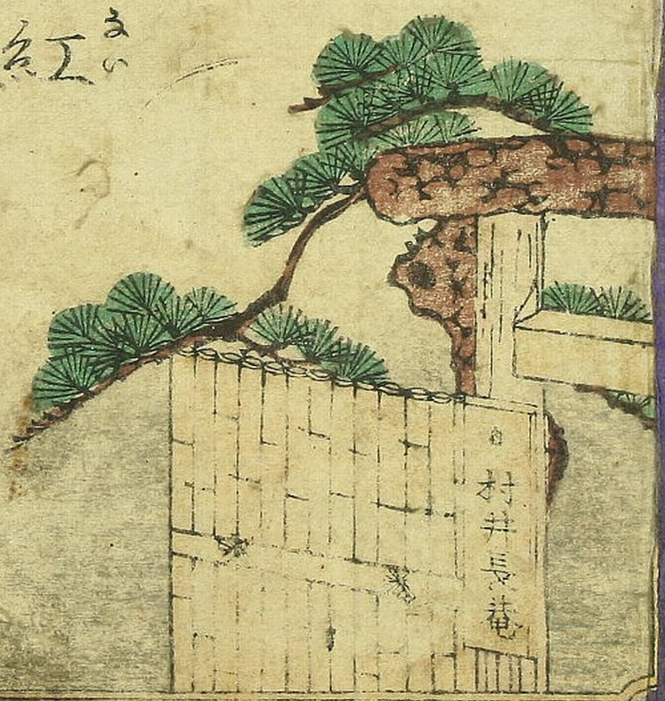
明治化文畧二冊 府縣産物往来一冊 算法早學一冊 文明教則往来一冊
千字文一冊 寶林雜書 円 開化諸職往来 円 散髪於滝開化姿見六冊
開化商賣往来 円 小學作文聯字法三冊 今古用文章 円 大久保仁政談四冊
諸證書文例二冊 大日本國名盡 円 開化庭訓往来 円 開化大津繪節二冊
開化勸農往来一冊 七體名頭字 円 新萬國往来 円 開化ゆゝ〳〵一二三冊
用文熟字講釈 円 農商用文 円 郵便頻書要用 前後二冊 新刻一代記本 品々
今體苗字盡 円 農商願屆證便覽 円 開化いろは節用一冊 旧往来本 品々
東京名所方角 円 開化消息往来二冊 進學往来 円 武者本類 品々
諸願屆證書式 円 漢語往来二冊 違式詿違條例 円 袋入本 品々

地本錦繪問屋 馬喰町三丁目十番地 出版人 小森宗次郎

村井長菴房桂画

櫻齋

札辻の雨夜の濃紅

津田秀琳編輯

紅木堂壽梓